シングルマザー移住が地域環境底上げ

を当て、移住支援を始めた兵庫県神河町は、町外から若い女性を呼び込むこと 若い女性の流出防止につながり、町の活性化に寄与している。 で、町内の人口を増加させ、子育て環境の底上げをはかった。SDGsが町内の 人口増大による地域おこしは、子育て世代の増加がカギ。シングルマザーに焦点



農業ジャーナリスト

|| || 「|| 「|| 「|| 「|| WAMADA Masaru

やまだ まさる

やまた よるる 1955年東京都生まれ。東京農工大学連合大学院修了。農 学博士。日本農業新聞記者を経てフリーランスの農業ジャ ーナリストに。日本農業新聞や週刊東洋経済、ニュースソ クラなどに執筆。著書に『亡国の密約』(共著、新潮社)、『農 業問題の基層とは何か』(共著、ミネルヴァ書房) など。

農高出身のキャリア活かす

2019年晩秋に兵庫県赤穂市から同県神河2019年晩秋に兵庫県赤穂市から同県神河町に引っ越してきて戸惑ったのは、カメムシだ町に引っ越してきて戸惑ったのは、カメムシだしたものの、窓や壁のすき間から飛び込んでくしたものの、窓や壁のすき間から飛び込んでくしたものの、窓や壁のすき間から飛び込んでくしたものの、窓や壁のすき間から飛び込んでく

を活かして、作業をこなす。トラクターの運転もを預け、職場に出勤するのが8時20分。仕事先のアグリイノベーション神河株式会社(以下、「AIK」)では、ニンジンなどの露地野菜の栽培「AIK」)では、ニンジンなどの露地野菜の栽培しかしすぐに、新生活になじんだ。平日は朝しかしすぐに、新生活になじんだ。平日は朝

休2日制のため週末は子どもと過ごす。と、子どもを迎えに行って家に帰る。会社は週も始めた。午後5時15分の定時で仕事を終える

移住を決断したことに迷いはないかと尋ねると、にこやかな笑顔で話してくれた。「子どもたちは最初に少し戸惑っていたけれど、いまは田舎の生活を楽しんでいます。近所のど、いまは田舎の生活を楽しんでいます。近所のとれたにはよくしてもらっており、安定したけれた。

こうした取り組みで名が知られる島根県浜田地方自治体が増えている。神河町もその一つだ。 戦と住居代など生活コストの安さを強みにして、 都会ほどの高い所得は望めないが、安定した

京で開いている。 同で一人親に焦点を当てた合同移住説明会を東市や北海道幌加内町など全国の6自治体と共

神河町では2016年からスタートした「シー神河町では2016年からスタートした「シークルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月ングルマザー移住支援事業」によって、20年3月では20月の移住・就職」というがある。

神河町のある集落では、小学生が1人だけだった。シングルマザー世帯2組が移住してきた会で地元の老人会の応援が熱を帯びたのはもちことで、小学生の数は一気に4人に増えた。運動ことで、地域に活気が戻ってきた。

さんは狙いを次のように説明する。する「ひと・まち・みらい課」副課長の石橋啓明神河町役場でシングルマザー移住支援を担当

子育て世代の女性に移住を呼び掛けています」がける必要があり、その対策の柱の一つとしててしまっています。悪循環にどこかで歯止めをす。原因は明らかで、若い人たちが町に残らずす。原因は明らかで、若い人たちが町に残らず

シングルマザー移住支援事業

探りの人口拡大策を始めた。

銀の馬車道に面し、豊かな森林資源を利用したる。明治時代、生野鉱山と瀬戸内の港を結んだピークに、現在は1万1200人まで減ってい町の人口は、1950年の1万7839人を



、ラクターでほ場整備に励む野村祥子さ*F*

定業が盛んだったが、高度経済成長期に林業が を業が盛んだったが、高度経済成長期に林業が を業した若者は、職を求めて多くが大阪 大学へ進学した若者は、職を求めて多くが大阪 大学へ進学した若者は、職を求めて多くが大阪 が続けば神河町の若年女性人口は、40年までの は、40年までの がたり、40年までの がた

情さん。 「対策の基本は、町内の子育て環境を改善し、 にしたいと住民には説明してきました。一番大 変だったのは、スタートする際に推進母体の意 思統一を図ることでした。新しいことを始める には手間もかかるし、不安もあります。消極的 な人たちも巻き込むことを心掛けました」と石 橋さん。

石橋さんによると、シングルマザー世帯に焦点を当てたのは、全国に130万人いるシングルマザーが、親元に身を寄せているシングルマザーがない。親元に身を寄せているシングルマザーがない。親元に身を寄せているシングルマザー世帯に焦ない。一方、全体の7割は高い住居費の負担に苦いる一方、全体の7割は高い住居費の負担に苦いる一方、全体の7割は高い住居費の負担に苦いる。

グルマザーに選んでもらえる」という発想だ。そという3本セットを提供できれば、都会のシン「神河町が安定した職場と住居、子育て環境

能性があるとそろばんをはじいた。の結果、人口減の町に子どもと女性が増える可

SDGs (持続可能な開発目標) は、女性や高

できる。
がきる。
だきる。
できる。
にきなど多様な人材の活用をうたっているが、

「シングルマザー」と銘打ってはいるものの、「シングルマザー」と銘打ってはいるものの、できたシングルファーザー世帯もあるという。 村河町では18歳まで医療費が無料。子育て世 代への家賃助成、午後6時15分までの学童保育、 移住に備えた体験施設などの支援策が実施さ 移住に備えた体験施設などの支援策が実施さ な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう な自然など「都会と田舎のいいとこどり」がう

移住者の支援は現町民と同水準

仕事のあっせん、町営住宅への入居などに、移住ば「町内の人と同じ支援である」というものだ。事業の原則は、一部の引っ越し費用助成を除け石橋さんによると、シングルマザー移住者支援面ではそれほど魅力的ではないように見える。一覧を比べてみると、同町の支援策はお金の一覧を比べてみると、同町の支援策はお金の

者への優遇はない。

を出て行ってしまうようなことも避けたい」と 支援は同じ前提であるが、奨励金が切れたら町 があったほうが関心を持ってもらえるでしょう。 石橋さんは説明する。 一方で現町民との格差は望ましくなく、町民と 「大都市で開く説明会では、何らかの奨励金

り、商工会、不動産業者などとの仕事の役割を 間に任せたほうが、スムーズに回ることがわか っていた。だが、住宅や仕事のあっせん実務は民 ころは、町役場がすべて前面に立って取り仕切 手厚く機能しているようだ。移住支援を始めた その代わり、町と地域の関連団体との連携は

移住促進の課題は住宅の確保

びかける、町営住宅を紹介する、町主体で宅地 を新たに盛り込んだ。住民に空き家の提供を呼 宅地33、公営住宅12、民間分譲住宅地18の造成 タープラン」を定めてきた。18年に決めた町の 造成することで目標戸数を供給する考えだ。 住宅マスタープラン後期計画では、公営分譲住 計画的な住宅や宅地の供給を進める「住宅マス 住促進を進めるため、神河町は2010年から 高い住宅の確保だ。町内の若い世代を含めて定 移住支援事業の課題の一つは低コストで質の

望を聞く。場合によってはハローワークなどを ての業種を対象にしている。町や商工会などが 福祉介護施設に限らず町内で不足しているすべ 事業のもう一つの柱である仕事のあっせんは 、求人情報を集め、移住希望者の要

通じて採用を決める。

ことが移住希望する人た 障制度のしっかりした雇 ちの条件となる。社会保 向きが少しでも向上する える給与水準だ。暮らし 用も欠かせない。 はシングルマザーに支払 仕事探しで一番の課題

です」と石橋さんは話す。移住希望者の要望だ か見つからないのが現実 にもらえる職場はなかな 毎月20万円の給与をすぐ 「

ほかからパッときて

長期的には町内での雇用に結びつけたいとい 条件を求め他地域で働くことも認めているが、 まうこともある。 妥協策の一つとして、町内に住み有利な雇用

けが「条件」となると地元企業が尻込みしてし

に書道教室などが始まった。 験、才能を活かした起業なども支援する。実際 もともとシングルマザーが持っている資格や経 も魅力的な人材に成長することをめざす。また、 操縦などを学ぶことで、採用した企業にとって 研修だ。パソコンのプログラミングやドローン るのが移住者などを対象にした技能アップの 両者のギャップを埋めるため、町が進めてい

くるシングルマザーは仕事の面、 する特命参事の真弓憲吾さんは言う。「移住して ?役場で移住者の雇用促進対策などを担当 . 生活の面で前

清水桃子さんは学童保育に子を預けフルタイムで勤務

れています」 場全体への好影響を実感しているようです。『私 で自分と子どもの生活を立て直したいという考 のところも紹介してほしい』という声が寄せら 向きな人ばかりです。知らない場所に飛び込ん えと行動力を持っています。雇用した側は、職

きめ細かい作業に向く女性

した。 だ。イチゴ栽培を中心に、ニンジンなどの有機野 米粉を使ったバームクーヘンの製造にも乗り出 して神河町が3年前に誘致して設立された企業 菜栽培を組み合わせている。今年からは地元産 冒頭に紹介したAIKは、地方創生の一 環と

かかわりがあり、5年ほど前から地方創生に関 訪れ社員と汗をかく。「仕事のうえで総務省との 西のIT系企業の経営者。週に AIKの代表取締役である上田秀文さんは関 1度、 神河町を

た」と語る。で自然が豊かな神河町で農業参入を決めましてたが、愛着のあるふるさと兵庫の、水が豊富心を持っていました。いくつかの地域を訪れま

AIKの事業は初年度が赤字。だが2019年度は黒字に転じる見込みだという。経営の柱となるイチゴは、四季成り品種の「信大BS8-9」がメイン。沖縄などでイチゴの施設建設から栽培まで指導するプラントメーカーの協力を得ている。「神河に行けばイチゴが年中食べられるという売り方をめざします。最初は男性職員が栽培を担当してもらいましたが、女性のほうがきめ細かい作業に向いています。日本で一番おいしい夏イチゴを提供したい」と上田さんは意気込む。

ではなく、現在も町外に住み、AIKに通う。以水桃子さん (37歳)。神河町の制度で移住したのイチゴ栽培に携わるのはシングルマザーの清

る。 まで野菜栽培の法人に勤めていた。「施設前は姫路で野菜栽培の法人に勤めていた。「施設市は姫路で野菜栽培の法人に勤めていた。」 「おいた」で開くイチゴの研修会に参加と言う。信州大学で開くイチゴの研修会に参加と言う。信州大学で開くイチゴの研修会に参加と言う。信州大学で開くイチゴの研修会に参加していた。「施設前は姫路で野菜栽培の法人に勤めていた。「施設

AIKで働くもう一人の40歳代のシングルマボーは、調理師の資格を活かして、バームクーベン作りに励んでいる。100%地元の米粉を使う高級菓子として販売する予定だ。2年半前に関西圏の都市部から同町に移住してきた。「自然がいっぱいの中、一軒家に住めるのは魅力的でした。地元の人たちは協力的でいてくれます。車の免許を取り、5分で職場に来られるのもありがたいです」と話す。

地域の子育で環境を底上げ

上田さんは今後、ニンジン加工施設を建設す

る予定だ。生果のおいしる予定だ。生果のおいしる予定だ。生果のおいしさと栄養を残したまま、できるようになるという。現在は新潟県の工場に製現在は新潟県の工場に製師に加工施設を新設し、同時にニンジン栽培を大幅に拡大。新たに15人の幅に拡大。新たに15人の面している。

ているようだ。

大グルマザー移住支援事業は、順調に滑り出しるが、安定した職場と住宅を確保し子育て環境の改善を必要とする都市のシングルマザー。両の対し、安定した職場と住宅を確保し子育て環境

げする進め方は共感が持てる。 町内の在住者を含めて全体の子育て環境を底上 の金を積んで移住者を招き入れるのではなく、

たことになる。 町の当初の狙いは、人口増加策の一環として たことになる。

歓迎しているように見える。
歓迎しているように見える。
が迎しているように見える。
を特別の現金支援が小さい分、移住を決めるシングルマザーは長い目で見た神河町の住みやすめ域社会に定着し、地元住民や企業とのさまざ地域社会に定着し、地元住民や企業とのさまざいる。

若い人たちの間で農村部に住むことへの関

源を利用した産業興しに知恵を絞ることが必要相互依存関係に発展する可能性もありそうだ。
カギを握るのは、地域の雇用力をどう高めていくのかだろう。町内に健康で文化的な暮らしいくのかだろう。町内に健康で文化的な暮らしいくのかだろう。町内に健康で文化的な暮らしが高まるなか、一人親を積極的に地方が受け入が高まるなか、一人親を積極的に地方が受け入



調理師の資格を活かしバームクーヘンを作る

出が深刻な地方自治体。子育て世代の女性の流

だろう。